

平成 2 8 年 5 月 3 0 日現在

機関番号：3 2 6 6 5

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：2 6 7 7 0 1 2 9

研究課題名(和文) 各種韻文の社会的機能に着目した東晋の文人・湛方生の詩文と長江流域文化に関する研究

研究課題名(英文) A Analysis to the Poems and Life of Zhan Fang-sheng

研究代表者

渡邊 登紀(WATANABE, Toki)

日本大学・生物資源科学部・講師

研究者番号：5 0 6 3 2 0 3 0

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000 円

研究成果の概要(和文)：東晋末の文学の諸相を明らかにするために、無名の文人である湛方生に着目し、各種韻文形式が当時の社会で果たした社会的機能についての解明を進めた。本研究期間で得られた成果は以下の通りである。(1) 湛方生詩文訳注の草稿は概ね完成している。(2) 陶淵明の贈答詩における四言詩と五言詩の機能性の相違について考察を行った。(3) 劉宋期における七夕詩の流行に着目し、東晋末から劉宋期にかけての文学変革の考察を行った。

研究成果の概要(英文)：The primary purpose of our assignment is to assemble ZHAN Fang-Sheng(湛方生)'s works, who is an obscure poet in the Eastern Jin. The second purpose is to examine the social function of poems at the period from the end of the Eastern Jin to the Liu-Song era. (1) I made translations and annotations of ZHAN Fang-Sheng(湛方生)'s works. (2) Through the bibliography investigation on TAO Yuan-Ming(陶淵明)'s poems, I clarified the different social functions between four-syllable-poem and five-syllable-poem. (3) I examined the spread and transformation of poems on 七夕 in detail and clarified strength of its influence to the Liu-Song era.

研究分野：中国文学

キーワード：中国古典文学 東晋 劉宋

1. 研究開始当初の背景

近年、国内外で中国六朝詩文研究はさかんに行われているが、その多くは詩を主な考察対象とする研究であると同時に、黄河流域文化に立脚した研究である。しかしながら、黄河流域文化と長江流域文化とが衝突し融合した六朝時代において、長江流域文化の存在を看過することはできず、長江流域文化の独自性を考慮に入れなければ、六朝時代の全体像を示したもとはなりえない。これと同様に、近体詩が確立されていく、まさにその過程にある六朝時代において、詩以外の多岐に渉る幾多の韻文形式の展開を視野に入れて考察しなければ、六朝詩文の全体像を示すことは甚だ困難である。

従って、詩以外の韻文形式を擁する作品をもその考察の対象に加えた、長江流域文化との二元的な立場からの文学史の再構築が中国六朝詩文研究の今後の課題である。例えば、現行の高等学校の「古典」教科書を複数見ると、「漢文」分野で取り上げられる韻文は、所謂「漢詩」として詩のみが焦点化されている。また同時に、そこに見える地域性は都市と辺塞との対比に集約され、その他の地域の独自性はほぼ閑却されてしまっている。もちろん、それらが中国古典詩文を代表するものではあることは紛れもない事実ではあるけれど、詩文の多様性及び地域の独自性を考慮しなければ、広大な国土を有する中国の多様な文化あるいは中国文化の全体像を理解することは難しい。本研究は、そこに革新を起こし、中国文化の多様性を解明するために、古典文学研究の視点から計画されたものである。

本研究の対象とするのは、まさに黄河流域文化と長江流域文化とが衝突し融合した時代、黄河流域の貴族たちが長江流域において亡命政権を確立した東晋王朝に仕えた、長江流域を出自とする文人たちの詩文である。長江流域出身の東晋の文人といえば陶淵明がつとに有名であるが、裏を返せば、陶淵明の存在のみが傑出しており、陶淵明以外の当時の文人たちの文学活動の様相についてはあまり明らかにはされていないとも言える。報告者は、かつて論文「湛方生と官の文学 東晋末の文学活動」(『歴史文化社会論講座紀要』京都大学人間・環境学研究科, 第8号, pp.1-16, 2011年2月, 査読有)において、陶淵明とほぼ同時期に活躍した無名の寒門文人・湛方生の存在に着目し、彼の文学活動の一端を明らかにした。本研究は、この論稿を基に着想されたものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、黄河流域文化を基準とした中央集権的な従来の六朝文学史を、考察対象を詩以外の多種多彩な韻文形式に拡大し、各種韻文形式が具有する社会的機能の解明

を通じて、長江流域文化との二元的な立場から再構築をすることにある。

ただし、限られた研究期間の中で、六朝の詩文の全てを対象とした考察を行うことは不可能なので、この研究期間においては、長江流域出身の文人・湛方生・陶淵明を中心とした東晋末から劉宋にかけての詩文を考察の対象とする。

そのため、本研究では、各種文集や類書に見える六朝詩文を断代的に部分的に分析するのではなく、東晋期に黄河流域の貴族が長江流域に流入したという時代背景を踏まえて、長期的かつ悉皆的に調査・分析を行い、系統的に整理を試みる。この研究によって、長江流域出身の文人およびその詩文の存在が明らかにされるのみならず、長江流域の文人たちが、どのような機会に、如何なる目的でそれらの詩文を制作したのかが解明され、東晋期における社会文化史的側面に関わる六朝詩文の社会的機能が抽出される見込みである。

これらの悉皆調査を実施した上で、当該詩文の制作過程や目的をもふまえた緻密な解析を行い、社会文化史的視点から、各種韻文形式の具有する社会的機能と長江流域との相関性および長江流域文化の独自性の解明し、新たな文学史の再構築に向けて、中国六朝時代における長江流域の文化的独自性の社会文化史的な視点からの相対化を本研究の目的とする。

3. 研究の方法

(1) 調査

調査にあたっては、国内では京都大学図書館および人文科学研究所(いずれも京都市左京区)、国立国会図書館(東京都千代田区)等で文献調査を行う。また、限られた期間内で効率的に作業を進めるために、「中国典籍データベース」等の電子テキストデータベースを積極的に活用する。

以下に述べる二つの視点からアプローチを試みることにした。

(2) 具体的な研究の方法

湛方生全詩文の訳注の作成

湛方生は東晋末の文人であるが、先行研究の中でも言及されることの少なかった無名の文人である。そのため、湛方生の詩文の全訳注は国内外においていまだ用意されていない。そこで、研究代表者は湛方生の詩文研究における基礎研究として、訳注の作成に着手した。

東晋詩文に見える各種韻文形式の分析

湛方生の詩文に見える詩以外の多種多彩な韻文形式に着目し、同種の韻文形式を他の文人の詩文から収集・整理・分析し、当該韻

文形式がどのような機会に、如何なる目的で用いられていたものであるかをその機能性に着目して検討する。

(3) 研究成果の報告

研究成果の報告については、学会発表および学術雑誌への論文投稿を行うほか、研究代表者が参加する研究会の場を活用し、研究者間での闊達な意見交換を行い、本研究の問題意識の共有を図る。

4. 研究成果

本研究における研究成果は次の(1)～(3)に述べる通りである。

(1) 湛方生詩文訳注の草稿の作成

湛方生詩文訳注の作成にあたり、京都大学図書館および人文科学研究所(京都市左京区)、国立国会図書館(東京都千代田区)、静嘉堂文庫(東京都世田谷区)において調査を行った。また、当初の計画にはなかったものの研究遂行の上で調査の必要性が生じたため、上海図書館(中国・上海市)にて海外調査を行った。

本研究期間内に湛方生訳注の草稿を概ね完成させることができた。ただし、現存する湛方生詩文の作品数は極めて限られたものであるため、これらの現存する湛方生詩文のみを考察対象として湛方生文学の全体像を把握することは極めて困難であると判断した。そのため、次いで、湛方生詩文の母胎となった文学的土壌についての考察が必要となり、以下の(2)(3)に述べる考察を行った。湛方生詩文の訳注の公表については、湛方生詩文の文学的土壌を明らかにした後に、さらに加筆修正を行ったうえで公表する予定である。

(2) 各種韻文形式が持つ機能性の考察

各種韻文形式が持つ機能性について考察を行うに先立ち、四言詩と五言詩の持つ機能性の違い、あるいは詩に付される序の機能性についての考察を試みた。

『陶淵明集』には、陶淵明が龐參軍という人物に送ったという「答龐參軍」詩が二篇あり、その一方が四言詩であり、他方が五言詩であることに着目し、それぞれの詩に見える内的効果(構成や修辞)及びその外的要因(実作の場)についての詳細な考察を行った。

これらの考察の結果、五言詩は手紙として、四言詩は対面の場で作られたものであること、また、それぞれの詩に付される序の機能性の相違(前者が先方に示すための手紙の一部分であるのに対し、後者は先方に見せることを想定して書かれたものではなく、あくまで書き手の備忘録として書かれたものであ

ること)を解明した。さらに、これらの詩の擁する機能(用途)の相違が、それぞれの詩に内在する時間の性質の相違を生み出していることについて明らかにした。

この成果は既に学術論文(渡邊登紀「二つの「答龐參軍」について—陶淵明の交際と居住空間」、『人間科学研究』(日本大学生物資源科学部)第12号、2015、pp.84-104、査読有)として纏めたが、しかしながら、詩以外の各種韻文形式の機能性については、今回の研究期間ではその考察には至らなかったため、引き続き考察を行う予定である。

(3) 文壇の創作傾向の考察

湛方生および東晋詩文の文学的土壌を検討するにあたって、東晋を含めたその前後の時代、すなわち西晋から劉宋にかけての文学を通時的に俯瞰し、そのなかで、劉宋期における七夕詩の流行に着目し、当時の文壇における七夕詩の流行を通して、東晋末・劉宋期の寒門文人の文学的土壌についての考察を行った。

七夕詩すなわち牽牛と織女にまつわる詩は、古くは「古詩十九首」、さらに『詩經』小雅・大東にさかのぼることが出来る。また、『續齊諧記』や『荊楚歲時記』といった歳時記の佚文には当時流布していた七夕説話が残されている。従来、個々の七夕詩はこれらの説話との関わりの中で理解されてきたが、本研究ではその考察を始めるにあたって、劉宋期に作られた七夕詩をこれらの説話から切り離してみることを試みた。

七夕以外の歳時を詠む詩としては、東晋・王羲之の蘭亭で行われた三月三日曲水の宴で詠われた詩群、あるいは九月九日すなわち重陽の節句を詠った陶淵明詩(「九日閑居」「己酉歲九月九日」)がつとによく知られているが、一方の七夕については、劉宋以前にも七夕詩は作られてきているものの、劉宋にいたって、七夕詩の創作が、文壇においてある種の流行であったことが予測される。というのは、劉宋期の七夕詩はある程度まとまった形で現在に伝わっており、その作者には当時の文壇の中心にいた「顔延之」と称される顔延之と謝靈運、さらに謝惠連、鮑照、王僧達、謝莊といった劉宋の文壇で活躍した詩人の名が挙げられる。しかし、だからといって王羲之の蘭亭で行われた三月三日曲水の宴のように、当時の名士たちが一同に会する場があったからというわけでもないようで、当時の文壇において、七夕の詩の創作が広く行われていたことが、七夕に関する詩文を収集し、整理・分析を進めるなかで明らかになった。

例えば、鮑照の七夕詩は「和王羲興七夕」は、その詩題にあるように王羲興すなわち王僧達の七夕詩(「七夕月下詩」)に和したものであり、彼らの七夕詩が個々に作られたものではなく、相互につながりを持つものであったことを示している。

鮑照・王僧達をはじめとする劉宋の詩人たちが、七夕という同一の題材をいかに詩に詠んだのか、また、これらの作品群の間にはいかなる相関性が存在するか、そして、彼らよりもやや早い時代を生きた陶淵明の文学との関わりについても検討を加えた。

この成果については、既に学会にて口頭発表（渡邊登紀、「劉宋の七夕詩について」、六朝学会第19回大会、2015年6月20日、二松学舎大学）を行ったが、学術論文としては現在、草稿の段階であり、さらに考察を深めたのちに近日中に学術論文としての発表を行う予定である。

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

渡邊登紀、「二つの「答龐參軍」について―陶淵明の交際と居住空間」、『人間科学研究』（日本大学生物資源科学部）第12号、2015、pp.84-104、査読有

〔学会発表〕（計1件）

渡邊登紀、「劉宋の七夕詩について」、六朝学会第19回大会、2015年6月20日、二松学舎大学（東京都千代田区）

6．研究組織

(1)研究代表者

渡邊 登紀（WATANABE,Toki）

日本大学・生物資源科学部・講師

研究者番号：50632030